

熊本城 復興に向けて

〈13〉天守の再建に向けて

明治10年(1877)に天守が焼失して以来、天守台のみが残る時代が続いた熊本城ですが、昭和2年(1927)の宇土櫓修復後、天守再建の機運が高まります。昭和4年(1929)、熊本城址保存会は再建を目標に設計に取り掛かり、陸軍技師の坂本新八氏らが設計にあたりました。その成果は、坂本氏によって昭和6年(1931)に「熊本城天守閣設計に就て」という題で『建築雑誌』に発表されました。地階を鉄筋コンクリート造とし、一階以上を木造とする案でしたが、この再建についての第六師団の意見は「同意を表し難し」というものでした。反対の主な理由として、師団司令部のある本丸に毎日多数の観覧人が往来することで執務が妨げられ、火災予防や軍機保護の上でも問題があること、天守閣から司令部が見下ろされることで軍の威信を損なうこと、などを挙げています。

結果的にこの時の再建はなりませんでしたが、第二次世界大戦後、再び天守再建の声が高まります。昭和30年(1955)には市民が「熊本城を再建しましょう」と、うちわ太鼓で街頭募金を呼びかけました。そして、昭和33年(1958)、熊本市は市政70周年の記念事業として再建を決定し、再建のための復元設計を、東京工業大学藤岡通夫教授に依頼しました。

熊本城の天守は、外観については焼失前の古写真が豊富に伝わっています。内部は寛政10年(1798)の「御天守方御間内之図」(熊本県立図書館所蔵)で、唯一各階の平面を知ることができますが、断面図などの立面が分かる資料が十分ではありません。藤岡氏はのちに著書『城と城下町』で、再建について次のように語っています。「きわめて鮮明に細部までわかる写真が残存していることは、設計上有利であることは申すまでもないが、設計の難易の上からみると却ってむずかしいことになる。(中略)建物が完成した後と同じ位置から撮った写真をもとの写真と比較してみれば、復



▲天守再建前の天守台



現代美術館ロビーに
展示されている木造模型
(熊本市蔵)

原(復元)設計の良否は一目瞭然としてしまう。」

再建は鉄筋コンクリートで行われましたが、藤岡氏は設計にあたり、先述の平面図や富重写真所のもつ明治初年の古写真を丹念に調査しました。そして、写真から瓦の枚数から軒の出を計算し、破風の位置を決めて木造の図案を作成し、それをもとにして10分の1縮尺の木造模型を製作させました。現在、熊本市現代美術館ロビーに展示されているこの模型は、横5.3m、奥行2.9m、高さ3.1mに及ぶ大きなもので、本来の天守の形を知ることのできる貴重な研究成果となっています。木造模型が制作された上で鉄筋コンクリートの図面が引かれ、破風などの現寸図(実際の大きさを描かれる図面)も藤岡氏自ら描き、検討されました。こうして、現代的な構造物ながら外観は明治10年の焼失前を思わせる大小天守の姿が蘇ったのです。